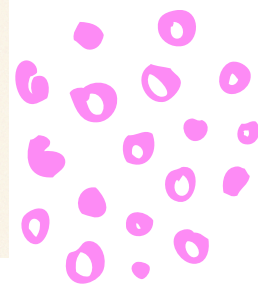
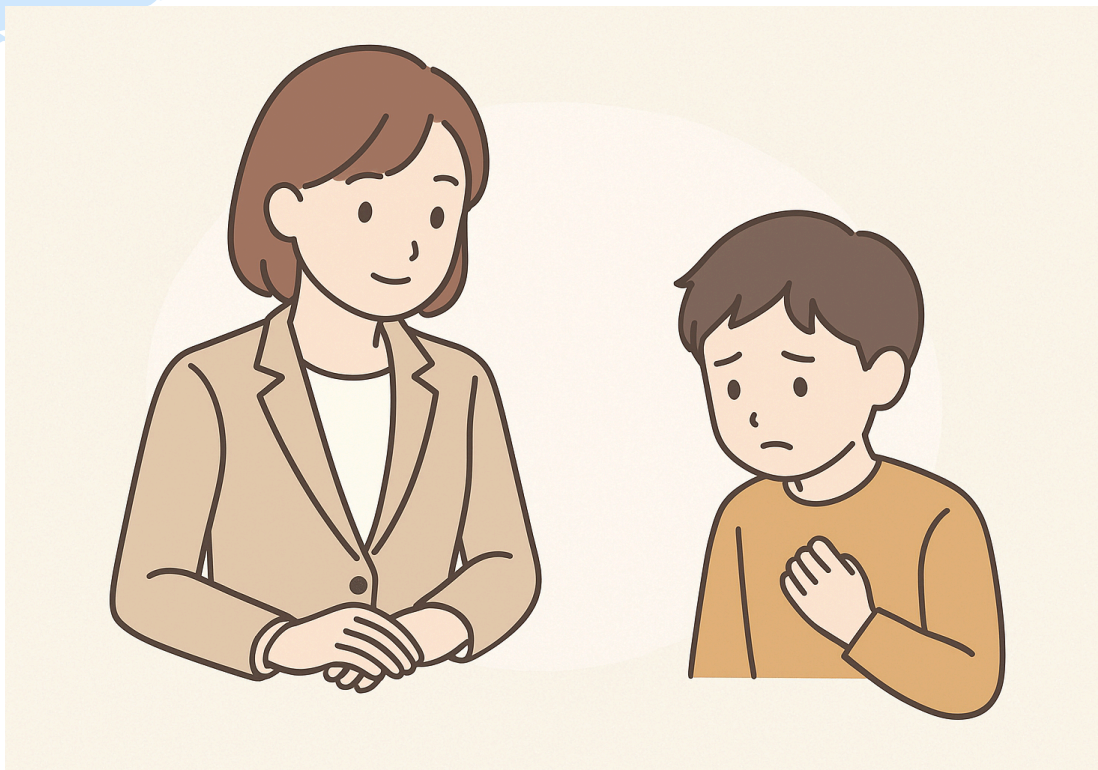


ゆりいか通信

第19号

令和7年11月



不登校は病気ではないけれど

秋も深まり、急に寒くなりました。心身ともに体調に留意したい季節です。行事や面談が多い忙しいこの時期は、子どもたちの体調の変化を見落とすしやすくなるかもしれません。

不登校そのものは病気ではありません。しかし、不登校の子どもたちが「病気でない」という保証はありません。朝起きられない、頭痛が続く、食欲がない——そんな訴えを「またいつものこと」と受け流してしまふと、背景にある身体的不調や心の疲れを見逃すことになります。

私自身、かつて調査の朝に「おなか痛い」という娘を「またそんなことを言って」と半ば無理に登校させたことがあります。いつもなら昼には落ち着くのにその日は夕方まで辛そうで、受診して初めて病気だったとわかりました。幸い大事には至りませんでした。幸い「またいつものこと」と思い込んで行動したことを深く反省しました。調査も大切ですが、子どもの健康以上に大事なものはありません。それ以来、「不登校は病気ではないけれど、不登校だ

から病気ではないと思いついてはいけません。

保護者より少し離れた立場で子どもを見守る教職員や支援者は、保護者が落ち着いて子どもの様子を見られるよう支えることが大切だと思います。また、その時は「特に問題がない」と言われていたお子さんでも、後になって病気が見つかることもあります。必要以上に医療機関を受診する必要はありませんが、体調不良を訴える子どもの辛さに寄り添い、必要に応じて受診や休養を勧めるなど、体のケアを優先する姿勢を共有できると安心です。

欠席が続くと保護者の焦りが強くなったり、子どもの体調不良の訴えに慣れてしまったりすることもあるかもしれません。保護者とは異なる視点で子どもを支える存在が身近にいることが、子どもたちの育ちを支えるために大切なのではないのでしょうか。季節の変わり目、どうぞ皆様もご自身の健康を大切にお過ごしください。

Our Activities

西陣朝マルシェ

缶バッジブース

ゆりいか研究会が活動の拠点を置いていりす西陣の近くの公園で行われた地域イベントに参加しました。

今回はあいにく朝から雨模様で、来場者はいつもより少なめでしたが、それでも足を止めてくださる方があり、子どもから大人の方まで缶バッジづくりを楽しんでくださいました。

おかげさまで目標数を達成することができ、冷たい雨の日にもかかわらず、あたたかい気持ちに包まれた一日となりました。

地域の方々が声をかけてくださったり、以前のイベントで知り合った方と再会できたりと、人とのつながりの大切さをあらためて感じる機会にもなりました。



フラツペ

【保護者・支援者向け】

先月はいつもと趣向を変えて「カリンバを奏でる会」としてみました。

カリンバは「親指ピアノ」とも呼ばれる箱型の小さな楽器で、オルゴールのようなかわいい音色が心を癒してくれます。

最初に持ち方や弾き方を確認するとすぐにでも音を出したくなるようでした。

ちょうどお誕生日の方がいっぱいだったので、「ハッピーバースデー」を練習しました。カリンバの音色が生きてくる曲の一つです。

また、その後はそれぞれ挑戦してみたい曲に取り組みむ時間。自分の心に馴染む曲は難しくても楽しいものです。少し休んでもまた弾いて——初心者でも楽しめるこの「おてがる」な楽器に、心を癒された一日でした。

訪問・交流あれこれ

この秋は、今後の活動の参考にと、いくつかの場所を訪ねました。

10月23日オムロン京都太陽株式会社さんの「ゆるスクール」を見学させていただきました。さまざまな部署で働く社員さんが退勤時間後に集まり、仕事に向き合う人々の挑戦を描いたドキュメンタリー番組と一緒に見ておられました。また感想を共有しておられ、その温かな時間に貴重な学びをさせていただきました。

また、29日には高等学校コンソシアム京都さんを訪問しました。市立高校の様々な学習活動を支えておられますが、ゆりいか研究会の活動にもご賛同いただき、広報紙への掲載や学校への呼びかけなどご協力いただきました。地域で行われている「上京朝カフェ」というつながりイベントにも参加し、西陣児童館の方ともつながることができました。今後も、様々なつながりを大切にしなが、活動の幅を少しずつ広げていきたいと思ひます。

Upcoming Events

11/15

♥ わいわいギャザリング

カリンバをさわってみたり、ボードゲームをしたりして過ごしましょう。

11/16

◆ フラッペ勉強会・交流会

11月は、「若者に多い消費者トラブル」です。ぜひ知識をアップデートしましょう。

12/14

♥ ユースシンポジウム2025

12月は「わいわいギャザリング」の代わりに、ユースシンポジウムに行きましょう！

12/21

◆ フラッペ勉強会・交流会

12月は、「自分を大切にする」がテーマです。ぜひご参加ください。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◆ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

今月はおてがるカリンバ協会代表の北村先生からご寄稿いただきました。

芸術の秋、音楽の秋―カリンバがつなぐ “音を楽しむ” ひととき

秋は「芸術の秋」「音楽の秋」といわれ、心が豊かになる季節です。名曲を聴くだけでなく、「自分でも何か演奏してみたい」と感じる方も多いでしょう。けれど、「楽器は難しい」「続けられるか不安」と、最初の一步をためらう方も少なくありません。

そんな方にこそおすすめしたいのが、アフリカ生まれの民族楽器「カリンバ」です。親指で弾いて音を出すこの楽器は、オルゴールのようにやさしく澄んだ音色が魅力。軽くて持ち運びやすく、価格も手頃で、どこでも気軽に楽しめます。

ただし、カリンバはピアノと異なる独特の構造をしており、最初は戸惑うことも。そこで「おてがるカリンバ協会」では、数字を追うだけで演奏できる独自の「数字タブ譜」を開発しました。音符が読めなくても、数字の通りに弾くだけで曲が完成。初心者でも30分ほどで合奏ができると好評です。

体験会では「これなら弾ける！」と笑顔になる方が多く、その声を受けて『おてがるカリンバ教本』も誕生しました。音楽をもっと身近に楽しんでほしい――そんな思いから始まった活動は、「教えてほしい」という声に広がり、講師養成にも力を入れるようになりました。

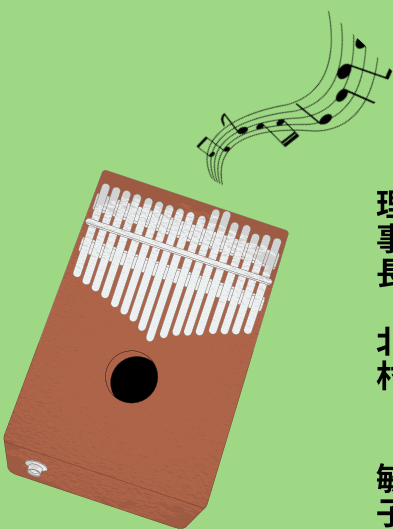
講師に必要なのは、演奏技術よりも「人に寄り添う心」。カリンバを通じて「自分にもできた！」という喜びが生まれ、それが自信や笑顔、そして生きる力へとつながっていきます。私たちおてがるカリンバ協会では、「カリンバを通じて社会貢献を」を理念に掲げ、指先を使うことで脳を活性化させる健康づくりや、誰もが楽しめるバリアフリー楽器の開発にも取り組んでいます。色でコードがわかる「コードカリンバ」、片手で弾ける「ドレミカリンバ」、マレットで奏でる「マカリンバ」など、多様な楽しみ方を提案しています。

カリンバの音は、人の心だけでなく動物にもやさしく届くといわれます。赤ちゃんが泣き止んだり、犬や猫、小鳥が心地よく眠ったりするという話も少なくありません。弾いている本人も、音に包まれながら自然と癒されていきます。忙しい毎日の中で、ほんの少し「音を楽しむ時間」を取り入れてみませんか。カリンバのやさしい音色が、あなたの心に穏やかな光をともしてくれることを願っています。

特定非営利活動法人

おてがるカリンバ協会

理事長 北村 敏子

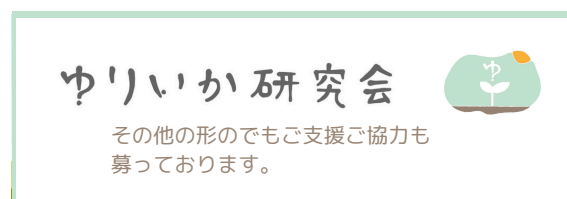
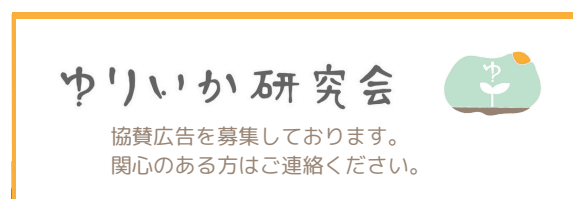
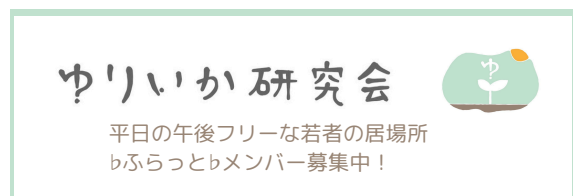
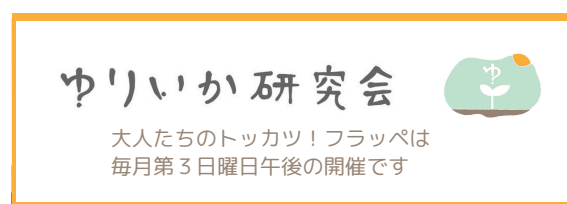
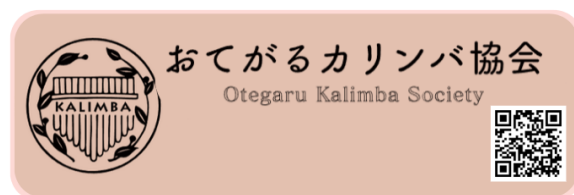


特定非営利活動法人
おてがるカリンバ協会
webサイトURL

Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（3月中旬～下旬、順不同）



多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま

クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。campfire community におきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



《連続小説》



金鶏鳥

宮美遊

幼少期 (十六)

信男の父弥之助は、祖父弥次郎から継いだ米屋を営んでいた。米屋は大変忙しい。母のオヒサはいつも、小学一年生になった信男と三年生になった辰郎が学校から帰って来るのを待ちながら、木製の乳母車(うばぐるま)に米や麦を積んでいた。

信男と辰郎は学校から帰るとすぐに、二人で隣村まで配達する。乳母車には五キログラムの米が六袋と一キログラムの麦が六袋入っている。配達先の家の前につくと米は辰郎が胸と両手で抱えて玄関の前まで持つて行く。麦は信男が片腕で持ち、もう一方の手で引き戸を開けて

「こんにちは。米と麦を持って来ました」

と挨拶をする。
「いつも御苦労さん。家の手伝い
えらいなあ」
とお客さんに褒(ほ)められるのが信男も辰郎も嬉しかった。
「あと一軒や、がんばるな」

と辰郎が励ますと、信男も

「まだまだ大丈夫や」

と元気に答える。

残りの家を回り、ようやく最後の米を渡し終えると、西日が辰郎の肩越しに信男を照らしつけてきた。

「やっと配達が終わったなあ、兄ちゃん」

信男がそういうと、辰郎が向きを変えて言った。

「早(は)よ、寺へ行こ」

信男は少し不安そうに呟いた。

「みんな居(お)るかなあ」

「まだ明るいので、居るに」

二人は駆け足で寺の広場へ向かった。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれから楽しんでご一読ください

絵：落葉画廊

編集後記

急に寒くなりました。こりす西陣でもこたつを出しました。やってくる子どもたちが一目散に飛び込む姿がほほえましいです。秋はどこへやら、もう冬だなあと感じるとともに、年末の慌ただしさが頭をよぎります。その前に、ほっと一息ついてこの一年を振り返ったり、これからの準備を整えたりする時間を大切にしたいと思います。そうしてまた、新たなご縁とともに、これまでのご縁もぬくぬくと温めていきたいです。

(恩庄か)

おしらせ

★12月21日のフラッペでは

「自分を大切にする」というテーマで考えを深めてみたいと思います。若者が「自分らしく生きる」ためにどうすればよいのか考えるきっかけにしたいだけだと思います。ぜひご予約ください。

★令和7年10月号までのゆり
いか通信をウェブサイトに掲載しました。関心ありの方
にご紹介ください。